

⑤5973 吉田五郎 2281P  
昭和9年 11月 20日

紀上62 → 5,974P - 1/2

そい 坂 19 紀上60~61P

# 第百章 現代及び未来

明治時代となった時、**記紀**は、**天皇の神聖**な地位の起源を権威づけるための**文献的典拠**として、**絶大な政治的役割**を發揮するにいたつた。

明治憲法下で**学問の自由は保障**されず、**国体観念**の**神聖**を脅かすおそれのあるような**学問研究**は、きびしく**抑制**された。

しかし、そのような**情勢**の下でも、**記紀**の研究を**抑止**することはできなかつた。

まず、**明治二十年**代から**三十年代**にかけて**日本書紀**の**紀年**に対する**批判的研究**が**学界**で**にわか**に**活発**となり、**星野恒**・**菅政友**・**吉田東伍**・**那珂通世**ら**競って論文**を**発表**した。

それは、**江戸時代**に**伴信友**が**企てた試み**を**精密に進展**させたもの**だった**。

712

こと

13の邦語辞書4に同文  
 邦99の訂正20<sup>p</sup> 白鳥庫吉 1129<sup>p</sup>  
 邦語辞書 佐伯有吉 105<sup>p</sup> 2014月又  
 5,974<sup>p</sup> - 3/2  
 係年 大正 小林 紀上62<sup>p</sup>

とす と思 論文を 発表 した。

その 都 邪馬台国 は、この 全 版 図 の 西南 部、す  
 なわち 肥後 国 の 内 に ある べき こと を 信 じた い  
 解 を 加 え、

「女 王 国 の 領 土 は 九 州 の 北 半 に 又 は 南 半 に  
 あり、

鳥 庫 吉 は、従 来 から の 九 州 説 を さ ら に 掘 り 上  
 げ、と くに 里 程 や 狗 奴 国 と の 関 係 な ど に 新 見  
 を 加 え、

系、岩 波 書 店、六〇し 六二頁 参 照)

明 治 四 十 三 年 (一 九 一 〇)、東 京 大 学 の 白  
 鳥 庫 吉 は、

久 米 邦 武 ・ 平 子 鐸 嶺 ・ 喜 田 貞 吉 ら に よ っ て 論  
 証 さ 小 た。 (「日 本 書 紀」(上) 日 本 古 典 文 学 大  
 の 紀 年 に も 問 題 が あり、歴 史 的 事 実 の 係 年 の  
 ため には 書 紀 紀 年 の 修 正 を 必 要 と す る こと が  
 固 ま た、欽 明 天 皇 紀 前 後 の 比 較 的 新 し い 部 分  
 学 界 で 定 説 化 す る こと 至 っ た。

く 引 き の ば さ れ て な わ け じ ゃ ない こと が、ほ ぼ  
 西 革 命 説 に よ り 机 上 で 作 為 さ れ た 観 念 の 産 物  
 で あり、客 観 的 な 歴 史 上 の 年 代 に 比 べ て 大 き  
 西 革 命 説 に よ り 机 上 で 作 為 さ れ た 観 念 の 産 物  
 西 革 命 説 に よ り 机 上 で 作 為 さ れ た 観 念 の 産 物

こと

こと

同(おな)じ年(とし)、京都(きょうと)大学(だいがく)の内藤(うちとう)虎次郎(こうじらう)は、方位(ほうい)記(き)
 事(こと)に誤(あやま)りがある(ある)ことを論(ろん)じて、従来(じゆんらい)の九州(きゅうしゅう)説(せつ)
 を批(ひ)判(はん)し、強(つよ)く畿内(きない)説(せつ)を主(しゆ)張(ちやう)した。
 ■この対照(たいしょう)的(てき)な二(に)つ(つ)の学説(がくせつ)に刺(し)戟(げき)さし、明(めい)治(ち)
 末(ま)から大(だい)正(しょう)へか(か)けて、邪馬台国(やまたいこく)研究(けんきゆう)は活(かつ)発(はつ)に
 な(な)った。一(いつ)邪馬台国(やまたいこく)99(きゅうじゅう)の謎(めい)は松本清張(まつもとせいぢやう)、産
 報(さんぽう)、二(に)〇(じゅう)頁(げつ)。一(いつ)邪馬台国(やまたいこく)し佐伯有清(さおひありせい)、吉川弘
 文館(ぶんくわん)、一(いつ)〇(じゅう)五(ご)頁(げつ)、二(に)八(はち)七(しち)頁(げつ)の表(ひょう)参(さん)照(しやう)
 大(だい)正(しょう)時(じ)代(だい)から昭(しょう)和(わ)時(じ)代(だい)初(しよ)期(き)の頃(ころ)
 津田(ついで)左(さ)右(ぎゆう)吉(きち)一(いつ)八(はち)七(しち)三(さん)一(いつ)九(きゅう)六(ろく)一(いち)
 津田(ついで)の研(けん)究(きゆう)は、大(だい)正(しょう)二(に)年(ねん)の日(ひ)神(かみ)代(だい)史(し)の新(しん)
 研(けん)究(きゆう)は始(はじ)まり、同(どう)八(はち)年(ねん)の日(ひ)古(こ)事(じ)記(き)及(およ)び日(ひ)
 本(ほん)書(しょ)紀(き)の研(けん)究(きゆう)は、同(どう)十(じゅう)三(さん)年(ねん)の日(ひ)神(かみ)代(だい)史(し)の研
 究(きゆう)は、昭(しょう)和(わ)八(はち)年(ねん)の日(ひ)上(じやう)代(だい)日(にっ)本(ほん)の社(しゃ)会(かい)及(およ)び思(し)想(さう)
 等(どう)の一(いつ)連(れん)の著(ちやく)述(じゆつ)と(と)し(して)大(だい)成(せい)さ(さ)した。
 ■記(き)紀(き)の伝(でん)え(え)る神(かみ)代(だい)お(お)よ(よ)び神(かみ)武(ぶ)以(も)下(げ)歴(れき)代(だい)初(しよ)頭(とう)
 の皇(こう)空(くう)起(き)源(げん)説(せつ)話(わ)の体(たい)系(けい)か、素(そ)材(ざい)と(と)し(して)は民(みん)間(かん)
 説(せつ)話(わ)をふ(ふ)く(く)み、ま(ま)た歴(れき)史(し)的(てき)事(じ)実(じつ)を反(はん)映(えい)す(する)部(ぶ)
 分(ぶん)もあ(あ)る(る)に(に)せ(せ)よ(よ)り、そ(その)全(ぜん)体(たい)的(てき)な構(こう)想(さう)は

(湖南) ことば  
 日本書紀終日録 95<sup>P</sup>-1/2 = 679

5,976P

天宮主改行

1949

改行

105P 105P (24)-24

六世紀前後の大和朝廷の宮人により、皇室の  
 日本統治を正当化する政治的を以て作為  
 さしたるものあり、神武天皇以下仲哀天皇に  
 いたる歴代天皇の系譜と、神武以後の所伝に  
 の記録ではないことと、天神以後の史実  
 である、天皇の系譜を除けば、正確な史実の記  
 録から出ていない、特になし、説話・記事のき  
 めめて多いこと、特に書紀についで、漢籍  
 仏典の文章を借した潤色が多く、天武・持統  
 紀三巻を除くと、陳述史料としてはそのまま  
 信憑力がたい記事の少なくなり、こと等、  
 今日ではほとんど古代史研究者の常識となつ  
 ている、学界の最大公約数的命題、これら津  
 田の一連の著作により、はじめて公然と提示  
 さされた。

な業績は、戦前の学界において十二分にこ水  
 を活用できる歴史的条件的な業績として孤立し  
 た。

津田 戦前に達成した高度

津田の研究は、たとえ津田の真意が天皇制から神秘主義的・前近代的非合理性を除去し、近代的立憲君主制たらしめようと念願するにあつたとはいえ、―――記紀の所伝をそのまゝ客観的史実となし、これを「国体観念」の「淵源」として権威づけしてきた国家権力の基本政策とは、到底両立しかたいものであつた。

満洲事変から日中戦争を経て太平洋戦争へ突入する昭和十年代の極端な言論弾圧時代に入ると、津田の研究もついに迫害を免れず、こ

とができません、昭和十五年（一九四〇）日神代史の研究に等しい著作が発売禁止の処分につせられた。

↑↑↑次いで昭和十七年（一九四二）津田は、これらの理由で有罪の判決を受けたり、たとの理由で有罪の判決を受けたり、権力でもって社会的に葬り去られた。

当時の全国民は、記紀の所伝を、日神聖不可侵の権威を有するものとして受容するしかなかつた。

異常な社会状態であつたことを、

裁判

この裁判は端的に物語られているといえよう。  
 ともあはれ、**記紀**の**所伝**に**対する正面**からの  
**批判的研究**は、江戸時代よりもかえって**困難**  
 になつたのだつた。(「日本書紀」(上)日本古  
 典文学大系、岩波書店、六三〇六五頁。7世  
 界大百科事典「平凡社」津田左右吉(参照)  
 一)か、こゝに時代であつたにもかかわ  
 らず、**考古学・神話学・民俗学**等の**明治以後**  
 に**新しく発達**してきた**学問の成果**は、**記紀**の  
**所伝**にも、**新しい学問の光**をあてる道を開い  
 た。  
 したが、**こゝらの研究**は、**津田**の研究のよう  
 に**正面から記紀を堂々と批判する姿勢**でなさ  
 れて**おらば**、**むしろ記紀の政治的権威**との  
**摩擦を意識的に回避**しつつ進められてきたと  
 いえよう。(「日本書紀」(上)日本古典文学大  
 系、岩波書店、六五頁参照)  
 \*

昭和二十年(一九四五)八月十四日、昭和  
 天皇の**裁断**により、日本はポツダム宣言を受

「日本史」高松 476  
269 1348  
私記の昭和天皇 313  
紀上66  
日本史評 617  
611

「日本史」高松 481

「日本史」高松 482  
桂本印 南北部  
5953-2/2  
5978  
日本史辞典 692  
幣原喜重郎 74996

「日本史」高松 481  
482  
5953-2/2  
5978  
日本史辞典 692  
幣原喜重郎 74996

「日本史」高松 481  
481  
482  
5953-2/2  
5978  
日本史辞典 692  
幣原喜重郎 74996

諾し、降伏した。翌十五日、太平洋戦争終戦  
の玉音放送。九月二日、ミズーリー号の艦上  
で無条件降伏文書に諸印し、第二次世界大戦  
は終結した。

明治憲法において絶対的君主であり、現人  
神とされた天皇の地位をいかにすべきか  
は、新憲法制定に当って重要な問題であつた  
連合国の多くは、天皇を戦犯として処遇す  
べしとする意向であつた。

天皇制を存続させるため、マ  
ツカサの指示のもと、幣原喜重郎首相に  
よつて起草された詔書が、昭和二十一年（一九  
四六）一月一日に発せられた人間宣言である。

天皇を以て現人神とし、且日本国民を以  
て他の民族に優越せる民族にして、延て世界  
を支配すべき運命を有すとの架空なる觀念に  
基づくものに非ず  
とのべ、天皇の神格が否定された。

新憲法が実施された。この新憲法は、天皇親  
臨して翌昭和二十二年（一九四七）五月三日

- ④ 平成十二年一月十六日
- ⑤ 平成十二年七月二十九日
- ⑥ 平成十三年一月十一日
- ⑦ 平成二十九年十一月十五日

- ⑧ 平成元年十二月十一日
- ⑨ 平成六年八月六日
- ⑩ 平成九年九月九日

天照大神の御心か、永久に輝き続けよう  
 願いを込めて筆を置きたり。

思ひ返せば、平安朝以後の天皇の歴史は、  
 時の権力者によつて揺さぶられつづけ、利用  
 されつづけられてきた苦難の道程でもあつた。

この水から後、天皇および日本国民は、どの  
 ような歴史を創つていくべきになるのだろう

か。

立、戦争の放棄を最も大きな特色とするもの  
 である。

政の原理の廃止、主権在民、基本的人権の確  
 立、

否定されたが、天皇という制度は廃  
 止されず、

天皇は、日本国の象徴であり、日本国民  
 統合の象徴である。

と定められた。(日本国憲法第一条)

12.5  
 241  
 〔完〕

H7.7.7  
H6.8.6  
99の記 237  
5939P

5.980P

99の記 238

收拾 1047P  
2330

解 < 2045P  
21P, 275P

おくそ  
臆測元 291  
主観元 1058  
自己の主観による  
行状

書き綴ったものである。

素朴な疑問をこそ大切にして、一つ一つ自問自答し、自ら首肯できると思えるところを  
素朴な疑問をこそ大切にして、一つ一つ自問自答し、自ら首肯できると思えるところを  
素朴な疑問をこそ大切にして、一つ一つ自問自答し、自ら首肯できると思えるところを

それが分らないから、これを解明への努力  
それが分らないから、これを解明への努力  
それが分らないから、これを解明への努力

そうした解釈をゆるすような曖昧さがあるといえよう。  
そうした解釈をゆるすような曖昧さがあるといえよう。  
そうした解釈をゆるすような曖昧さがあるといえよう。

日本古代の歴史についての見解は、もつれ  
日本古代の歴史についての見解は、もつれ  
日本古代の歴史についての見解は、もつれ



元875<sup>ノ</sup> 錯後和到行 元1575<sup>ノ</sup> 独善的 元1594<sup>ノ</sup> 論述 元2365<sup>ノ</sup> 殊に 元816<sup>ノ</sup> 霞 元411<sup>ノ</sup> 5964<sup>ノ</sup> 1/2  
 まちか 元134<sup>ノ</sup> 5,982<sup>ノ</sup> 全 元214<sup>ノ</sup> 後 元19<sup>ノ</sup>

けたら幸いである。

(米)

我が国の往古の歴史は、霞がかかったように朦朧としてゐる。

そこでこの「物語」においては、止むを得ず、仮定や推測を多用した。そして、後代の

事実からおして論述した箇所も少なくない。このようない、事実関係の裏付け証拠に不備

のある所などでは殊に、全くの考え違いや、独善的な妄想に過ぎない誤り等、多々あろう。

また、常につきまとう、

文献解釈の際の早呑込みによる錯誤。根本的な認識不足(一徹な思い込み)

なども多いことであろう。この小まで、幾度修正してきたことか

底数えき小なり程である。書いた後から後から想像もしなかつた真実が分かり、赤面する

思いで訂正を繰り返してきたのだ。そして、数多くの誤りが明白になり、手直しが必要になることと思ひ込ま。

に違いない。

H 6. 8. 7 (日) H 29 (2017) 12. 15 (日) ~ 12. 19 (木)  
 H 9. 9. 9 (日) H 30 (2018) 12. 3 (月) ~ 12. 3 (2日)  
 H 12. 1. 16 H 13. 1. 11

令和元 5. 2 (木) ~ 5. 3 (2日)  
 11. 29 (金) ~ 12. 1 (4日)  
 " 2 (2020) 7. 22 (日) ~ 7. 24 (4日)  
 12. 10. 3, 10, 12, 12. 10  
 令和4 (2022) 1. 2 (衆人代)

7/24 F-7/23  
 7/23

5,983

ぼんじん 万人 5,1837  
 得心 5,1595 納得するに  
 壁主 5,353  
 公を 5,2756 世向に発すること  
 自説小林807  
 持論 5,1139  
 批語 5,1906  
 突き出す

■ とはいえ先人偉も、そうした間違いを恐れず、  
 自説を公表してきたといえよう。

■ なお、微力な一個人の力で、立ちだかる巨壁を突き崩し、数々の謎を徹底的に解明する

のばい、このことは、不可能の一語につき

■ 今は、万人が納得するであろう完璧を求め、  
 よりも、一日も早く世に問うことの方を愛ひ

■ この物語で述べたような考え方を公にする

ことによつて、次への新たな展開が可能になる  
 かも知れない、と心せかさめるからである

干支表

1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳	7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉	11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未	21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳	31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯	41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑	51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥
177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118
117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58
57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	前1	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123
124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183
184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243
244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303
304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363
364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423
424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483
484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543
544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603
604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663
664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723
724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783
784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843
844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903
904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963

667

图·表·写真图版索引

图：

表：

写真图版：

番号	卷	頁	番号	卷	頁	番号	卷	頁	番号	卷	頁
1	1	36	51	1	361	101	2	102	151	2	307
2	1	37	52	1	372	102	2	104	152	2	322
3	1	58	53	1	376	103	2	105	153	2	323
4	1	71	54	1	377	104	2	107	154	2	326
5	1	84	55	1	385	105	2	108	155	2	327
6	1	85	56	2	9	106	2	112	156	2	328
7	1	86	57	2	10	107	2	119	157	2	329
8	1	87	58	2	11	108	2	124	158	2	335
9	1	90	59	2	12	109	2	126	159	2	360
10	1	91	60	2	13	110	2	126	160	2	363
11	1	92	61	2	15	111	2	128			
12	1	96	62	2	17	112	2	134			
13	1	97	63	2	17	113	2	135			
14	1	100	64	2	18	114	2	137			
15	1	101	65	2	19	115	2	138			
16	1	103	66	2	23	116	2	146			
17	1	116	67	2	24	117	2	147			
18	1	134	68	2	30	118	2	149			
19	1	135	69	2	31	119	2	152			
20	1	143	70	2	33	120	2	170			
21	1	160	71	2	35	121	2	172			
22	1	167	72	2	35	122	2	172			
23	1	170	73	2	35	123	2	173			
24	1	194	74	2	34	124	2	174			
25	1	203	75	2	34	125	2	174			
26	1	218	76	2	34	126	2	177			
27	1	219	77	2	41	127	2	177			
28	1	220	78	2	44	128	2	180			
29	1	248	79	2	46	129	2	181			
30	1	277	80	2	50	130	2	185			
31	1	279	81	2	51	131	2	186			
32	1	281	82	2	54	132	2	194			
33	1	282	83	2	55	133	2	200			
34	1	284	84	2	57	134	2	214			
35	1	286	85	2	60	135	2	219			
36	1	295	86	2	61	136	2	225			
37	1	306	87	2	69	137	2	241			
38	1	306	88	2	73	138	2	242			
39	1	306	89	2	74	139	2	249			
40	1	306	90	2	74	140	2	260			
41	1	306	91	2	75	141	2	264			
42	1	306	92	2	80	142	2	270			
43	1	311	93	2	82	143	2	281			
44	1	314	94	2	83	144	2	288			
45	1	315	95	2	87	145	2	289			
46	1	318	96	2	89	146	2	291			
47	1	325	97	2	94	147	2	293			
48	1	352	98	2	95	148	2	299			
49	1	352	99	2	96	149	2	300			
50	1	360	100	2	99	150	2	303			

番号	卷	頁
1	1	29
2	1	38
3	1	39
4	1	83
5	1	113
6	1	114
7	1	148
8	1	148
9	1	156
10	1	182
11	1	319
12	2	22
13	2	218
14	2	329
15	2	368

番号	卷	頁	番号	卷	頁	番号	卷	頁
1	1	63	51	2	86	101	2	319
2	1	120	52	2	87	102	2	333
3	1	120	53	2	120	103	2	333
4	1	136	54	2	121	104	2	339
5	1	137	55	2	122			
6	1	138	56	2	124			
7	1	162	57	2	129			
8	1	164	58	2	144			
9	1	171	59	2	148			
10	1	183	60	2	161			
11	1	275	61	2	166			
12	1	293	62	2	167			
13	1	318	63	2	167			
14	1	321	64	2	170			
15	1	327	65	2	177			
16	1	327	66	2	179			
17	1	327	67	2	183			
18	1	327	68	2	183			
19	1	344	69	2	184			
20	1	351	70	2	190			
21	1	355	71	2	190			
22	1	355	72	2	191			
23	1	356	73	2	191			
24	1	357	74	2	194			
25	1	357	75	2	194			
26	1	359	76	2	196			
27	1	365	77	2	201			
28	1	366	78	2	202			
29	1	370	79	2	204			
30	1	370	80	2	205			
31	1	371	81	2	208			
32	1	374	82	2	229			
33	1	376	83	2	230			
34	1	383	84	2	232			
35	1	383	85	2	233			
36	1	396	86	2	234			
37	2	14	87	2	235			
38	2	26	88	2	239			
39	2	47	89	2	250			
40	2	52	90	2	253			
41	2	52	91	2	255			
42	2	52	92	2	255			
43	2	54	93	2	262			
44	2	55	94	2	263			
45	2	57	95	2	267			
46	2	58	96	2	276			
47	2	58	97	2	292			
48	2	63	98	2	294			
49	2	75	99	2	311			
50	2	84	100	2	314			

668

図

番号	巻	頁	番号	巻	頁
161	3	16	207	3	522
162	3	51	208	3	595
163	3	83	209	3	601
164	3	143	210	3	603
165	3	194	211	3	610
166	3	239	212	3	620
167	3	242	213	3	636
168	3	261	214	3	641
169	3	281	215	3	642
170	3	282	216	3	643
171	3	283	217	3	651
172	3	284	218	3	652
173	3	289	219	3	685
174	3	292	220	3	688
175	3	295	221	3	689
176	3	296	222	3	690
177	3	303	223	3	691
178	3	306	224	3	696
179	3	307	225	3	788
180	3	314	226	3	844
181	3	315			
182	3	346			
183	3	349			
184	3	356			
185	3	361			
186	3	362			
187	3	363			
188	3	365			
189	3	384			
190	3	388			
191	3	389			
192	3	393			
193	3	418			
194	3	441			
195	3	442			
196	3	473			
197	3	474			
198	3	475			
199	3	485			
200	3	486			
201	3	489			
202	3	490			
203	3	493			
204	3	512			
205	3	514			
206	3	515			

表

番号	巻	頁
16	3	19
17	3	24
18	3	44
19	3	202

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
105	3	39	152	3	419
106	3	40	153	3	419
107	3	52	154	3	420
108	3	67	155	3	421
109	3	68	156	3	425
110	3	84	157	3	429
111	3	85	158	3	430
112	3	88	159	3	431
113	3	104	160	3	432
114	3	107	161	3	433
115	3	195	162	3	434
116	3	196	163	3	436
117	3	212	164	3	439
118	3	213	165	3	441
119	3	246	166	3	444
120	3	250	167	3	447
121	3	252	168	3	479
122	3	255	169	3	491
123	3	256	170	3	504
124	3	256	171	3	519
125	3	256	172	3	526
126	3	257	173	3	533
127	3	260	174	3	545
128	3	261	175	3	599
129	3	261	176	3	599
130	3	268	177	3	605
131	3	268	178	3	606
132	3	269	179	3	613
133	3	272	180	3	618
134	3	299	181	3	619
135	3	316	182	3	621
136	3	317	183	3	622
137	3	320	184	3	624
138	3	344	185	3	631
139	3	348	186	3	645
140	3	351	187	3	653
141	3	354	188	3	697
142	3	364	189	3	697
143	3	364	190	3	697
144	3	382	191	3	698
145	3	396	192	3	699
146	3	401	193	3	733
147	3	407	194	3	734
148	3	408	195	3	738
149	3	409	196	3	755
150	3	410	197	3	853
151	3	412			

図		
番号	巻	頁
227	4	41
228	4	78
229	4	87
230	4	99
231	4	105
232	4	173
233	4	174
234	4	181
235	4	201
236	4	213
237	4	232
238	4	267
239	4	381
240	4	511
241	4	535
242	4	540
243	4	541
244	4	555
245	4	567
246	4	568
247	4	569
248	4	570
249	4	611
250	4	647
251	4	675
252	4	680
253	4	801
254	4	814
255	4	831
256	4	838
257	4	839
258	4	847
259	4	848
260	4	849
261	4	855
262	4	865

表		
番号	巻	頁
20	4	37
21	4	135
22	4	358
23	4	377
24	4	654
25	4	808
26	4	817
27	4	893
28	4	906

写真図版		
番号	巻	頁
198	4	44
199	4	65
200	4	108
201	4	111
202	4	112
203	4	113
204	4	122
205	4	175
206	4	182
207	4	183
208	4	419
209	4	420
210	4	425
211	4	490
212	4	491
213	4	501
214	4	503
215	4	543
216	4	580
217	4	603
218	4	604
219	4	652
220	4	701
221	4	702
222	4	835
223	4	846
224	4	859
225	4	892
226	4	893
227	4	897
228	4	902
229	4	905

図

番号	巻	頁
263	5	40
264	5	41
265	5	46
266	5	61
267	5	65
268	5	68
269	5	73
270	5	102
271	5	103
272	5	104
273	5	197
274	5	200
275	5	231
276	5	293
277	5	297
278	5	322
279	5	414
280	5	445
281	5	445
282	5	450
283	5	531
284	5	562
285	5	563
286	5	568
287	5	571
288	5	577
289	5	588
290	5	590
291	5	596
292	5	597
293	5	620
294	5	659
295	5	674
296	5	698
297	5	712
298	5	715
299	5	737

表

番号	巻	頁
29	5	218

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁	番号	巻	頁
230	5	42	267	5	525	304	5	656
231	5	49	268	5	533	305	5	657
232	5	51	269	5	536	306	5	658
233	5	52	270	5	541	307	5	661
234	5	53	271	5	542	308	5	662
235	5	62	272	5	543	309	5	662
236	5	63	273	5	546	310	5	664
237	5	64	274	5	547	311	5	675
238	5	67	275	5	556	312	5	687
239	5	69	276	5	557	313	5	688
240	5	70	277	5	558	314	5	689
241	5	105	278	5	559	315	5	689
242	5	106	279	5	560	316	5	695
243	5	107	280	5	561	317	5	705
244	5	198	281	5	579	318	5	718
245	5	199	282	5	580	319	5	720
246	5	210	283	5	581	320	5	726
247	5	211	284	5	582	321	5	739
248	5	232	285	5	589	322	5	741
249	5	256	286	5	591	323	5	744
250	5	274	287	5	591	324	5	750
251	5	308	288	5	592	325	5	751
252	5	309	289	5	593	326	5	790
253	5	313	290	5	593	327	5	794
254	5	314	291	5	594			
255	5	362	292	5	595			
256	5	413	293	5	601			
257	5	426	294	5	605			
258	5	427	295	5	609			
259	5	428	296	5	610			
260	5	459	297	5	613			
261	5	460	298	5	635			
262	5	464	299	5	636			
263	5	491	300	5	647			
264	5	495	301	5	653			
265	5	499	302	5	654			
266	5	500	303	5	655			

図

番号	巻	頁
300	6	56
301	6	63
302	6	65
303	6	83
304	6	89
305	6	106
306	6	107
307	6	184
308	6	186
309	6	290
310	6	375
311	6	376
312	6	393
313	6	398
314	6	416
315	6	519
316	6	522
317	6	545
318	6	549
319	6	550
320	6	617
321	6	634
322	6	755
323	6	776
324	6	777
325	6	792

表

番号	巻	頁
30	6	91

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
328	6	33	365	6	477
329	6	34	366	6	478
330	6	35	367	6	479
331	6	36	368	6	482
332	6	52	369	6	483
333	6	53	370	6	486
334	6	54	371	6	506
335	6	57	372	6	507
336	6	58	373	6	523
337	6	64	374	6	632
338	6	68	375	6	633
339	6	69	376	6	635
340	6	70	377	6	679
341	6	76	378	6	750
342	6	120	379	6	751
343	6	121	380	6	773
344	6	155	381	6	774
345	6	156	382	6	775
346	6	159	383	6	775
347	6	164	384	6	778
348	6	179	385	6	779
349	6	185	386	6	779
350	6	204	387	6	780
351	6	228	388	6	781
352	6	231	389	6	782
353	6	232	390	6	783
354	6	278	391	6	784
355	6	283	392	6	785
356	6	284	393	6	786
357	6	350	394	6	787
358	6	360	395	6	788
359	6	400	396	6	789
360	6	401	397	6	790
361	6	426	398	6	791
362	6	431	399	6	818
363	6	432			
364	6	433			

図

番号	巻	頁
326	7	20
327	7	56
328	7	79
329	7	100
330	7	242
331	7	272
332	7	277
333	7	257
334	7	363
335	7	398
336	7	431
337	7	507
338	7	514
339	7	526
340	7	528
341	7	553
342	7	602
343	7	605
344	7	606
345	7	607
346	7	616
347	7	618
348	7	629
349	7	635
350	7	636
351	7	641
352	7	645
353	7	646
354	7	647
355	7	650
356	7	654
357	7	661
358	7	667
359	7	679
360	7	680
361	7	681

表

番号	巻	頁
31	7	107
32	7	108
33	7	496

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
400	7	34	439	7	403
401	7	35	440	7	405
402	7	36	441	7	406
403	7	37	442	7	407
404	7	46	443	7	411
405	7	59	444	7	412
406	7	79	445	7	413
407	7	87	446	7	420
408	7	88	447	7	428
409	7	99	448	7	432
410	7	147	449	7	434
411	7	191	450	7	438
412	7	218	451	7	439
413	7	239	452	7	487
414	7	243	453	7	503
415	7	244	454	7	504
416	7	244	455	7	505
417	7	245	456	7	506
418	7	246	457	7	508
419	7	247	458	7	522
420	7	248	459	7	522
421	7	281	460	7	531
422	7	284	461	7	540
423	7	311	462	7	542
424	7	341	463	7	567
425	7	364	464	7	568
426	7	366	465	7	569
427	7	367	466	7	587
428	7	368	467	7	617
429	7	369	468	7	621
430	7	374	469	7	622
431	7	383	470	7	642
432	7	390	471	7	651
433	7	391	472	7	655
434	7	392	473	7	668
435	7	393	474	7	677
436	7	399	475	7	678
437	7	399	476	7	682
438	7	400	477	7	715

図

番号	巻	頁	番号	巻	頁
362	8	81	401	8	461
363	8	88	402	8	469
364	8	93	403	8	470
365	8	95	404	8	479
366	8	112	405	8	483
367	8	166	406	8	523
368	8	167	407	8	523
369	8	168	408	8	559
370	8	169	409	8	576
371	8	170	410	8	582
372	8	176	411	8	588
373	8	202	412	8	611
374	8	203	413	8	612
375	8	217			
376	8	218			
377	8	300			
378	8	301			
379	8	305			
380	8	322			
381	8	333			
382	8	335			
383	8	342			
384	8	353			
385	8	355			
386	8	356			
387	8	360			
388	8	373			
389	8	377			
390	8	385			
391	8	386			
392	8	389			
393	8	403			
394	8	414			
395	8	415			
396	8	416			
397	8	428			
398	8	431			
399	8	432			
400	8	436			

表

番号	巻	頁
34	8	108
35	8	109
36	8	130
37	8	154
38	8	252
39	8	443
40	8	498
41	8	603

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁	番号	巻	頁
478	8	75	517	8	336	556	8	513
479	8	76	518	8	337	557	8	514
480	8	90	519	8	338	558	8	515
481	8	94	520	8	343	559	8	516
482	8	96	521	8	344	560	8	517
483	8	101	522	8	352	561	8	518
484	8	171	523	8	354	562	8	519
485	8	172	524	8	359	563	8	520
486	8	173	525	8	372	564	8	521
487	8	179	526	8	375	565	8	522
488	8	196	527	8	376	566	8	524
489	8	197	528	8	382	567	8	558
490	8	198	529	8	387	568	8	573
491	8	199	530	8	388	569	8	589
492	8	200	531	8	390	570	8	618
493	8	201	532	8	401	571	8	619
494	8	203	533	8	402	572	8	620
495	8	214	534	8	422	573	8	621
496	8	223	535	8	423	574	8	687
497	8	224	536	8	424	575	8	702
498	8	231	537	8	425	576	8	707
499	8	232	538	8	426	577	8	708
500	8	248	539	8	427			
501	8	266	540	8	428			
502	8	267	541	8	430			
503	8	268	542	8	449			
504	8	295	543	8	459			
505	8	296	544	8	460			
506	8	304	545	8	460			
507	8	306	546	8	463			
508	8	307	547	8	464			
509	8	311	548	8	465			
510	8	312	549	8	466			
511	8	315	550	8	467			
512	8	328	551	8	468			
513	8	329	552	8	486			
514	8	330	553	8	497			
515	8	331	554	8	504			
516	8	334	555	8	505			

図

番号	巻	頁
414	9	120
415	9	133
416	9	147
417	9	283
418	9	322
419	9	326
420	9	327
421	9	352
422	9	401
423	9	413
424	9	414
425	9	456
426	9	484
427	9	486
428	9	518
429	9	519
430	9	616
431	9	617
432	9	675
433	9	708
434	9	740
435	9	750
436	9	751

表

番号	巻	頁
42	9	22
43	9	139
44	9	140
45	9	192
46	9	220
47	9	395
48	9	434
49	9	437
50	9	534
51	9	604
52	9	784

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
578	9	40	617	9	521
579	9	59	618	9	562
580	9	66	619	9	709
581	9	115	620	9	710
582	9	116	621	9	740
583	9	119	622	9	741
584	9	121	623	9	742
585	9	122	624	9	743
586	9	122	625	9	752
587	9	123	626	9	766
588	9	124	627	9	770
589	9	125	628	9	771
590	9	148	629	9	772
591	9	149	630	9	773
592	9	278	631	9	774
593	9	282	632	9	775
594	9	290			
595	9	299			
596	9	303			
597	9	304			
598	9	318			
599	9	319			
600	9	320			
601	9	321			
602	9	323			
603	9	452			
604	9	482			
605	9	482			
606	9	483			
607	9	483			
608	9	485			
609	9	492			
610	9	493			
611	9	494			
612	9	495			
613	9	496			
614	9	497			
615	9	498			
616	9	520			

675

図

番号	巻	頁
437	10	64
438	10	76
439	10	80
440	10	81
441	10	82
442	10	88
443	10	116
444	10	142
445	10	143
446	10	144
447	10	155
448	10	214
449	10	254
450	10	273
451	10	275
452	10	276
453	10	278
454	10	282
455	10	293
456	10	375
457	10	396
458	10	511
459	10	512
460	10	557
461	10	589
462	10	669
463	10	753
464	10	803
465	10	815
466	10	817
467	10	865
468	10	887
469	10	971

表

番号	巻	頁
53	10	686

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
633	10	68	670	10	377
634	10	69	671	10	381
635	10	83	672	10	386
636	10	111	673	10	387
637	10	138	674	10	388
638	10	141	675	10	507
639	10	162	676	10	510
640	10	201	677	10	523
641	10	206	678	10	722
642	10	219	679	10	751
643	10	220	680	10	752
644	10	226	681	10	756
645	10	228	682	10	764
646	10	232	683	10	765
647	10	243	684	10	804
648	10	247	685	10	816
649	10	252	686	10	830
650	10	265	687	10	962
651	10	266	688	10	970
652	10	267	689	10	983
653	10	271			
654	10	272			
655	10	277			
656	10	279			
657	10	280			
658	10	281			
659	10	292			
660	10	320			
661	10	321			
662	10	322			
663	10	342			
664	10	352			
665	10	358			
666	10	359			
667	10	361			
668	10	374			
669	10	376			

676

図

番号	巻	頁	番号	巻	頁
470	11	102	503	11	591
471	11	163	504	11	607
472	11	183	505	11	626
473	11	184	506	11	633
474	11	250	507	11	654
475	11	251	508	11	697
476	11	265	509	11	698
477	11	282	510	11	703
478	11	283	511	11	727
479	11	288	512	11	766
480	11	289			
481	11	308			
482	11	310			
483	11	342			
484	11	343			
485	11	418			
486	11	439			
487	11	441			
488	11	448			
489	11	463			
490	11	464			
491	11	465			
492	11	466			
493	11	469			
494	11	472			
495	11	473			
496	11	485			
497	11	503			
498	11	539			
499	11	549			
500	11	571			
501	11	572			
502	11	586			

表

番号	巻	頁
—	—	—

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
690	11	109	727	11	627
691	11	137	728	11	628
692	11	201	729	11	631
693	11	202	730	11	632
694	11	203	731	11	648
695	11	204	732	11	699
696	11	249	733	11	704
697	11	252	734	11	726
698	11	264	735	11	728
699	11	284	736	11	743
700	11	286	737	11	744
701	11	287	738	11	745
702	11	302	739	11	746
703	11	307	740	11	747
704	11	309	741	11	748
705	11	312	742	11	770
706	11	315	743	11	772
707	11	318	744	11	774
708	11	356	745	11	774
709	11	357	746	11	775
710	11	366	747	11	775
711	11	437	748	11	777
712	11	438	749	11	778
713	11	446	750	11	778
714	11	447	751	11	782
715	11	450	752	11	793
716	11	451			
717	11	454			
718	11	467			
719	11	468			
720	11	484			
721	11	540			
722	11	541			
723	11	550			
724	11	552			
725	11	573			
726	11	600			

図

番号	巻	頁
513	12	26
514	12	37
515	12	110
516	12	114
517	12	116
518	12	174
519	12	194
520	12	195
521	12	229
522	12	247
523	12	256
524	12	302
525	12	314
526	12	316
527	12	331
528	12	379
529	12	397
530	12	423
531	12	424
532	12	485
533	12	559
534	12	648
535	12	648
536	12	664

表

番号	巻	頁
54	12	283
55	12	501
56	12	663

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
753	12	27	790	12	685
754	12	28	791	12	687
755	12	29	792	12	688
756	12	51	793	12	689
757	12	111	794	12	690
758	12	113			
759	12	115			
760	12	161			
761	12	172			
762	12	173			
763	12	175			
764	12	187			
765	12	209			
766	12	226			
767	12	246			
768	12	277			
769	12	307			
770	12	315			
771	12	330			
772	12	332			
773	12	334			
774	12	380			
775	12	416			
776	12	438			
777	12	444			
778	12	445			
779	12	458			
780	12	472			
781	12	476			
782	12	484			
783	12	492			
784	12	502			
785	12	526			
786	12	527			
787	12	604			
788	12	625			
789	12	684			

678

図

番号	巻	頁	番号	巻	頁
537	13	73	569	13	554
538	13	89	570	13	569
539	13	90	571	13	573
540	13	100	572	13	582
541	13	105	573	13	626
542	13	128			
543	13	134			
544	13	154			
545	13	175			
546	13	178			
547	13	184			
548	13	198			
549	13	212			
550	13	215			
551	13	234			
552	13	235			
553	13	236			
554	13	250			
555	13	258			
556	13	276			
557	13	289			
558	13	290			
559	13	328			
560	13	360			
561	13	376			
562	13	381			
563	13	383			
564	13	399			
565	13	493			
566	13	507			
567	13	548			
568	13	549			

表

番号	巻	頁
57	13	47
58	13	185
59	13	551
60	13	576
61	13	593

写真図版

番号	巻	頁	番号	巻	頁
795	13	50	828	13	461
796	13	69	829	13	475
797	13	94	830	13	476
798	13	95	831	13	542
799	13	96	832	13	543
800	13	101	833	13	635
801	13	102			
802	13	176			
803	13	180			
804	13	191			
805	13	199			
806	13	206			
807	13	210			
808	13	214			
809	13	241			
810	13	242			
811	13	244			
812	13	251			
813	13	252			
814	13	277			
815	13	278			
816	13	302			
817	13	303			
818	13	304			
819	13	308			
820	13	359			
821	13	377			
822	13	378			
823	13	382			
824	13	389			
825	13	403			
826	13	418			
827	13	451			



前 三	七	七月、野見宿禰が当麻蹶速と相撲をとり、蹶速を殺す。
前 七	二十三	十一月、誉津別命が鵠(白鳥)を弄んで、言葉を使うことができただので、鵠を献じた湯河板拳を賞して鳥取造の姓を賜い、鳥取部・鳥養部・誉津部を定める。
前 五	二十五	三月、倭姫命、天照大神の鎮座地を求めて、近江・美濃をめぐる、伊勢国に祠を立てる。
前 二	二十八	十一月、殉死始まる。
三	三十二	七月、皇后日葉酢媛命(一に云はく、日葉酢根命ともいう)の葬に際し、野見宿禰の進言を採択。『古の風』として続いてきた殉死を止め、殉死者のかわりに埴輪を『陵墓』に立てる。
六	九十	〔後漢へ朝貢して四年後の〕二月、田道間守に命じ、常世国の非時香果(橘)を求めさせる。
七	九十九	七月、天皇、崩御する。年一四〇歳。
八	景行 一	三月、田道間守、帰国する。七月、大足彦忍代別尊、即位する。
九	十二	七月、熊襲がそむく。
十	二十七	十月、日本武尊を遣わし、熊襲を征討させる。
十一	八十六	

\*「垂仁朝に相当する」欽明朝のことなのだろう。(第1表、第9表参照)

\*埴(粘土)で作った輪「底部穿孔土器」「円筒埴輪」は、股を刺され、泣きうめきながら死んでゆく殉死者の身代りとして、墳丘上で悲しげな音を出したのかも知れない。(なお、本来は、欽明朝のことなのであろう、と思われる。垂仁紀二十八年年条、同三十二年条。孝徳天皇の大化二年条。第1表参照)

\*五七年、「倭国」極南界の倭奴国、後漢へ朝貢する。(後漢書倭伝、第2図、第3表参照)

\*『記』では一五三歳。

\*景行天皇の皇子「小碓尊」は、『熊襲』(南九州一帯の球磨、贈於地方)を平定されたばかりか、「倭国大乱」においても、ひとときわ輝やかしい武功を立てられたのだらう。

一七	三十七	
一八	四十	七月、日本武尊を遣わし、蝦夷を征討させる。
一九	四十三	この年、日本武尊、蝦夷征討を終えての帰還途中、伊勢国の能褒野で薨じ、白鳥となって『倭国』を目指し飛ぶ。
二〇	六十	十一月、天皇、崩御する。年一〇六歳。
二一	成務 一	一月、稚足彦尊、即位する。
二二	三	一月、武内宿禰を大臣とする。
二三	五	九月、国郡に造長を立て、県邑に稲置を置く。
二四	六十一	六月、天皇、崩御する。年一〇七歳。
二五	仲哀 一	一月、足仲彦尊、即位する。
二六	二	一月、氣長足姫尊(神功皇后)を皇后とする。三月、熊襲がそむいたので、天皇・皇后、平定に赴く。
二七	八	一月、周芳の沙塵浦から、天皇は檀日宮(福岡市香椎宮)へ向かう。九月、天皇、新羅征討の神託を信せず、強いて熊襲を討ち、勝利しないで還る。

\*一〇七年、倭国王帥升等、後漢へ朝貢する。(後漢書倭伝、第3表参照)

\*日本武尊伝説は、景行天皇の皇子(小碓尊)の説話と、敏達天皇の皇子(皇太子押坂彦人皇子)の説話とを合成し、熊襲・蝦夷征討の話として作り上げたものではなからうか。(第1表参照)

\*蝦夷征討を終えた押坂彦人皇子が、能褒野で薨去されたのかも知れない。

\*『記』では一三七歳。

\*「倭国大乱」(二四七〜一八八頃)が勃発する。(後漢書倭伝)

\*『記』では九十五歳。

\*天皇は紀伊国の徳勒津宮から、皇后は角鹿(敦賀)の筭飯宮から、穴門豊浦宮(下関市)へ行幸する。

\*「六年後には不審にも、下関の東に位置する」周芳国の沙塵(今の山口県防府)に、天皇がおられるたという。

\*恐らく、仲哀七年末頃まで、…天皇は、東の拘奴国と戦っておられたのであろう。

255+120=375年

三三	十	十月、ようやく課役を命じて、宮室を造る。
三九	七	九月、天皇は、さらに辛抱して、宮室の修理を許可せず。
三六	四	二月、天皇、高臺に登り、域の中に煙のあがらぬのを見て百姓の貧窮を察する。三月、百姓の課役を三年のあいだ免除する。
三三	一	一月、大鷦鷯尊、即位する。
三〇	四十一	二月、天皇、明宮で崩御する（難波の大隅宮で崩御されたともいう）。年一〇歳。阿知使主ら、呉より筑紫に帰る。工女の兄媛を胸形大神に奉る。太子菟道稚郎子と大鷦鷯尊とが皇位を譲りあう。
二六	三十七	二月、阿知使主らを呉に遣わし、縫工女を求めさせる。
二五	二十五	この年、百済の直支王が薨じ、久爾辛が王となる。
二四	二十八	九月、高麗の王、使を遣わして朝貢する。太子菟道稚郎子が、高麗の表を読み、怒ってその表を破る。
二二	二十	九月、倭漢直の祖阿知使主らが渡来する。
一九	十六	二月、百済より王仁が来朝し、太子菟道稚郎子の師となる。この年、百済の阿花王が薨する。
一八	十五	八月、百済の王、阿直岐を遣わして良馬二匹を貢る。
一七	十四	この年、三月、秦氏の祖、百済から渡来する。
一六	十三	この年、百済が辰斯王を殺して阿花王を立てる。
一五	三	この年、百済が辰斯王を殺して阿花王を立てる。
一四	一	一月、嘗田別皇子、即位する。
一三	六十九	四月、皇太后（神功皇后）、稚桜宮で崩御する。年一〇〇歳。
一〇	一	神功

二〇	九	二月、天皇、急病にかかり崩御する（賊の矢にあたつて崩つたともいう）。年五十二歳。十月、神功皇后、新羅を征討する。十二月、嘗田天皇が筑紫で誕生する。
一九	一	この年、摂政元年。
一八	三十九	この年の条に『魏志』明帝景初三年六月の記事を引く。
一七	四十	この年の条に『魏志』正始元年の記事を引く。
一六	四十三	この年の条に『魏志』正始四年の記事を引く。
一五	四十七	四十七
一四	四十八	四十八
一三	五十五	この年、百済の肖古王（三国史記に第十三代近肖古王（在位三四六〜三七五とある））薨する。
一二	五十六	この年、百済王子貴須、王となる。
一一	六十二	この年、葛城襲津彦を遣わして新羅を征討させる。
一〇	六十四	この年、百済の貴須王が薨じ、王子枕流が王となる。
九	六十五	この年、百済の枕流王が薨じ、王子阿花が年少のため、叔父の辰斯が王位を奪う。
八	六十六	この年の条に『晋起居注』武帝泰初（始か）二年十月の記事を引く。

①1914-34 正始中、卑彌呼死す  
 247年 248年  
 女王の出現 小林洋雄 3027

\*『記』も五十二歳。  
 \*二二九年（魏景初三）六月、倭の女王卑彌呼、大  
 夫難斗米らを遣わし帯方郡へ至り、魏帝に朝献す  
 ることを求める。  
 \*二四〇年（魏正始一）、建中校尉梯儻ら、詔書・印  
 綬をもって倭国に来る。  
 \*二四三年（魏正始四）、倭王、使を遣わして生口な  
 ごとを献じる。  
 \*二四七年（魏正始八）、倭の女王卑彌呼、狗奴国・  
 男王卑彌弓呼素と不和。（魏志倭人伝）  
 \*二四八年（？）、卑彌呼死す。（魏志倭人伝）  
 \*近肖古王が薨じたのは三七五年。（日本書紀の編者  
 が、あえて拙なさをよそおい、第五代肖古王（在  
 位一六六〜二二四）と混同したふりをし、且つ、  
 干支を二巡すらしらしたものとと思われる）  
 \*阿知使主ら、呉より筑紫に帰る。工女の兄媛を胸形大神に奉る。太子菟道稚郎子と大鷦鷯尊とが皇位を譲りあう。  
 \*貴須王が薨じたのは三八四年。  
 \*枕流王が薨じたのは三八五年。  
 \*二六六年（晋泰始二）十一月、倭の女王、使者を遣わし晋に貢献する。（第一表参照）  
 \*辰斯王が薨じたのは三九二年。  
 \*阿花王が薨じたのは四〇五年。  
 \*直支王が薨じたのは四二〇年。  
 \*『記』では一三〇歳。なお『記』の崩年干支は甲午（三九四年）。（第一表参照）  
 \*西の大倭国（九州・山口地方）に統合された直後の『日辺日本国』（中国・近畿地方）の人々の窮状を憂え、仁徳天皇は自ら率先して堪え忍ばれたのだらう。  
 \*決して、応神朝末に、日本国中が荒廃していたわけではあるまい。（第一表・第三表参照）

①1914-34 正始中、卑彌呼死す  
 247年 248年  
 女王の出現 小林洋雄 3027  
 阿知使主ら、呉より筑紫に帰る。工女の兄媛を胸形大神に奉る。太子菟道稚郎子と大鷦鷯尊とが皇位を譲りあう。  
 貴須王が薨じたのは三八四年。  
 枕流王が薨じたのは三八五年。  
 二六六年（晋泰始二）十一月、倭の女王、使者を遣わし晋に貢献する。（第一表参照）  
 辰斯王が薨じたのは三九二年。  
 阿花王が薨じたのは四〇五年。  
 直支王が薨じたのは四二〇年。  
 『記』では一三〇歳。なお『記』の崩年干支は甲午（三九四年）。（第一表参照）  
 西の大倭国（九州・山口地方）に統合された直後の『日辺日本国』（中国・近畿地方）の人々の窮状を憂え、仁徳天皇は自ら率先して堪え忍ばれたのだらう。  
 決して、応神朝末に、日本国中が荒廃していたわけではあるまい。（第一表・第三表参照）

2542P-1/3 ~  
2544P-2/3 3723

三三	十一	十月、難波高津宮の北の野原を掘って堀江を造り、南の水(旧大和川)の水を引き入れ、西の海(大阪湾)へ流す。また、北の河(淀川の南岸沿いに茨田堤)を築く。
三二	十二	七月、高麗国、鉄の盾と鉄の的を貢る。
三一	六十	〔書紀紀年で二五二年(千支二運)下げて三七二年〕百済が倭国へ「七枝刀」を献する。(神功皇后紀、撰政五十二年条参照)
三〇	八十七	一月、天皇、崩御する。
二九	六十三	二月、去来種別尊、磐余稚枝宮で即位する。
二八	四	八月、諸国に国史を置き、言事を記させる。十月、石上溝を掘る。
二七	六	三月、天皇、崩御する。年七十歳。
二六	一	一月、瑞齒別尊、即位する。十月、河内の丹比に都を造り、柴籬宮といふ。
二五	五	一月、天皇、崩御する。
二四	一	十二月、雄朝津間稚子宿禰尊、即位する。
二三	四	九月、氏姓を定めるため、盟神探湯をする。
二二	十一	三月、衣通郎姫のために、藤原部を定める。
二一	四十二	一月、天皇、崩御する。十二月、穴穗皇子、即位する。

\* 難波高津宮の宮廷生活に必要な水を、(旧大和川)から取り入れたのであろう。南から北へ突出する半島(上町台地)の東麓に沿って「猫間川」を掘り、高津宮の北で西方の大阪湾へ注ぐようにしたのではなかるうか。(第四十八章「南の水・北の河」において詳述。「大阪府の歴史」藤本篤、山川出版社、一九一頁(大和川つけかえ地図)。他参照)

\* 「百済王と太子が、恩を蒙っている倭王のために、七支刀を三六九年に造り、三七二年に朝廷へ献上した」と推測される。(第1表参照)

\* 三七五年、近肖古王(在位三四六〜三七五)薨去。

\* 「記」では八十三歳。崩年干支は丁卯(四二七年)。

\* 「記」では六十四歳。崩年干支は壬申(四三二年)。

\* 「記」では六十歳。崩年干支は丁丑(四三七年)。

\* 「遠く飛鳥の宮」奈良県高市郡明日香「て天の下を治める。(允恭記)」

\* 「記」では七十八歳。崩年干支は甲午(四五四年)。

紀 454 未 29  
3159P-2/3 109

四六	二	二月、大草香皇子を殺し、その妻中蒂姫を宮中にいれる。大草香皇子に仕えていた難波吉師日香奴と二人の子が殉死する。
四五	一	八月、天皇、眉輪王(大草香皇子の子)に殺される。大泊瀬幼武皇子(後の雄略天皇)、眉輪王・坂合黒彦皇子を殺す。十月、大泊瀬幼武皇子、市辺押磐皇子(履中天皇の長子)を殺す。十一月、大泊瀬幼武皇子、泊瀬の朝倉で即位する。平群臣真鳥を大臣、大伴連室屋・物部連目を大連とする。
四四	二	十月、天下、天皇を誹謗して「大悪天皇」といふ。
四三	八	二月、身狭村主青・檜前民使博徳を呉国(南朝の宋(四二〇〜四七九))へ遣わす。
四二	九	三月、紀小弓宿禰・蘇我韓子宿禰・大伴談連・小鹿火宿禰らを新羅に遣わして戦わせたが苦戦し、大伴談連ら戦死する。
四一	十四	一月、身狭村主青らが、呉国の使とともに、呉の献した手末の才伎・漢織・呉織・衣縫の兄媛・弟媛らを率いて住吉津に泊る。
四〇	二十一	三月、天皇、「百済が高麗に破れた」と聞き、久麻那利(熊津)を以て汶洲王に賜い、其の國(百済國)を救い興す。
三九	二十三	四月、百済の文斤王が薨じ、昆支王の第二子末多王を王とする。八月、天皇、崩御する。この年(八月以前)、筑紫の安致臣・馬飼臣らに高麗を討たせる。
三八	一	一月、白髪武広国押稚日本根子尊、磐余の養粟で即位する。大伴室屋大連を大連、平群真鳥を大臣とする。
三七	二	二月、白髪部舍人・白髪部膳夫・白髪部敷負を置く。十一月、播磨国より市辺押磐皇子の子「仁徳天皇の直系の子孫。履中天皇の孫」である億計・弘計の二王を迎える。

\* 「記」では五十六歳。但し「記」には安楽天皇の崩年干支が記されていない。

20本  
395上  
泗北城  
4455P4  
武寧王 紀下14P  
武寧王陵 3144P-6/8

\* 「記」では二四歳。「大日本史」に允恭七年生まれ、六十二歳とある。なお「記」の崩年干支は己巳(四八九年)。

四四	五	一月、天皇、崩御する。億計・弘計の二王が皇位を譲りあつたので、その姉飯豊青皇女が朝政を執る。十二月、飯豊青皇女が崩じる。
四五	一	一月(弟の)弘計王、即位する。
四七	三	四月、天皇、八釣宮で崩御する。
四八	一	一月(兄の)億計王、石上高宮で即位する。
四八	十一	八月、天皇、崩御する。十二月、小泊瀬稚鸕鷀皇子(仁賢天皇の子)、泊瀬列城で即位する。
五〇	二	九月、天皇、妊婦の腹をさいて胎児をみる。
五〇	三	十月、人の指甲を剥がし、暑預を掘らせる。
五二	四	四月、人の頭髪をぬいて樹に登らせ、樹の根元を切り倒し、登っている人を落下させ殺す。
五三	五	六月、池の水を排出するため堤に通した樋の中へ人を入れ、外に流れ出る時、三刃の矛で刺し殺す。
五五	七	二月、人を樹に昇らせ、弓で射墜して啖う。
五六	八	三月、女を裸にして平板の上にするわらせ、馬の交尾をみせる。十二月、天皇、崩御する。

\* 『記』には清寧天皇の崩年干支が記されていない。  
 『神皇正統記』に三十九歳、『水鏡』等に四十二歳。  
 『皇代記』等に四十二歳。  
 \* 近つ飛鳥の宮(大阪府羽曳野市飛鳥)で天の下を治める。(顕宗記。尚、肥後国からの遠近によって宮の名としたのたろう、と思われる)  
 \* 『記』では三十八歳。『一代要記』等に四十八歳。  
 『紀』は在位三年とするが、『記』には治世八年とある。  
 \* 『水鏡』『紹運録』等に歳五十。『帝王編年記』等に五十一。  
 \* 武烈即位前紀の冒頭に記載されている通り、事実には英邁な天皇であつたろう、と察せられる。  
 \* 仁徳天皇の皇系は、武烈(天皇)で絶える。『天皇家嫡流の断絶』(第一期一朝時代の終焉)を正当化する為、……あえて、武烈天皇は暴君だったと述べたのたろう。

五七	継体	一 一月、男大迹王、樟葉宮に至る。二月、男大迹王、即位する。
五二	五	十月、都を山背の筒城に遷す。
五八	十二	三月、弟国に都を遷す。
五三	十七	五月、百済の武寧王(諱を斯麻王という)が薨する。
五六	二十	九月、磐余の玉穗に都を遷す。(一本に云はく、七年なりといふとある。)
五七	二十一	六月、近江毛野臣と筑紫国造の磐井とが戦う。八月、物部麁鹿火大連を遣わして磐井を討たせる。このとき天皇は、親ら斧鉞を大連に授け、「長門(今の山口県西部)より東は朕が制圧する。筑紫より西を汝が制れ。云々」とのたまう。
五八	二十二	十一月、物部麁鹿火、筑紫の御井郡で磐井と交戦し、……ついに磐井を斬る。十二月、磐井の子筑紫君葛子、糟屋屯倉を献じて死罪を贖うことを求める。
五九	二十三	四月、任那から阿利斯等が来朝する。
五九	二十五	二月、天皇、磐余玉穗宮で崩御する。年八十二歳。なお或本に、「天皇、二十八年歳次甲寅(五三四)に崩りましぬ」とある。とはいえ、『百濟本記』に、「辛亥年(五三三)、日本の天皇及び太子・皇子、俱に崩斃りましぬ」とあるので、その文を取り、継体二十五年(五三二)崩と記載する。二月に継体天皇から讓位されて、勾大兄皇子、即位する。
五四	一	一月、都を大倭国の勾金橋に遷す。
五五	二	十二月、天皇、崩御する。年七十歳。武小広国押盾皇子、即位する。

\* 『三國史記』百濟武寧王二十三年(五三三)条に、「夏五月。王薨。諡曰武寧」と記されている。  
 \* 継体天皇は、都を大倭国(肥後国)内に遷して天照大神を戴き、東の日辺日本国(大和国)の武烈天皇と対峙されたのではなからうか。(第1表参照)  
 \* 「磐井の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているにすぎないようである。(継体紀二十一年八月一日条末尾参照)  
 \* 『記』では四十三歳。『記』の崩年干支は丁未(五二七年)。  
 \* 継体即位前紀から、「武烈八年に」継体天皇は五十七歳だったのたろう」と推測される。(第1表参照)  
 \* 『記』の崩年干支は乙卯(五三五年)。

この本  
日本武尊 229頁 3369-74

五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四五
宣化	欽明	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達
一	二	三	四	五	六	七	八	九
一月、都を檜隈の蘆入野に遷す。	二月、天皇、崩御する。年七十三歳。天國排開広庭皇子、即位する。	三月、物部弓削守屋大連、寺塔・仏像・仏像を焼く。八月、天皇、崩御する。九月、橘豊日皇子、即位する。磐余に宮を造り、池辺双槻宮という。蘇我馬子宿禰を大臣とし、物部弓削守屋連を大連とする。	四月、淳中倉太珠敷皇子、即位する。物部弓削守屋大連を大連とし、蘇我馬子宿禰を大臣とする。	五月、穴穗部皇子(欽明天皇の皇子)、陰に天下に王たらむ事を謀り、物部守屋大連と兵を率いて磐余の池辺を囲む。『逆君』(三輪君逆と君)知りて、後宮に隠れる。穴穗部皇子自ら行き、敏達天皇の寵臣三輪君逆を射殺す。	六月、百濟国王、經論・律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工を献ずる。	七月、蝦夷の魁帥綾糟ら、【景行天皇の御世の例に従い】川の中へ入り、水をすすつて忠誠を盟う。(第1表参照)	八月、百濟より仏像二軀がもたらされる。蘇我馬子、その仏像二軀を請い受け、使者を四方に遣わして、修行者を求める。	九月、百濟より仏像二軀がもたらされる。蘇我馬子、その仏像二軀を請い受け、使者を四方に遣わして、修行者を求める。

\* 『法王帝説』は欽明天皇の治世を四十一年とする。  
 『皇年代略記』等では崩年六十三歳。『一代要記』に六十二、『神皇正統記』に八十一などとする。  
 \* 五七四年、廣戸豊聡耳皇子(聖徳太子)誕生。(法隆寺釈迦像光背銘文の薨去の年から逆算)  
 \* 日本武尊并二人ヲこの本 229頁  
 \* 景行天皇の皇子「小碓尊」が、『熊襲』を平定された時、……熊襲の魁帥らは、川の中へ入り、水をすすつて忠誠を盟つたものと思われる。  
 \* 敏達天皇の皇子「押坂彦人皇子」は、複数回、『蝦夷』討伐の為に出征されたのではなからうか。  
 \* 『皇年代略記』『紹運録』等に四十八歳。『扶桑略記』『愚管抄』等に二十四、『神皇正統記』に六十一とある。なお、『記』の崩年干支は甲辰(五八四年)。  
 \* 大三輪逆君(敏達紀十四年六月条参照)が、単独で後宮へ入られる筈はあるまい。また、大三輪逆君を殺しても、天下の王になれるわけがない。

五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四五
宣化	欽明	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達	敏達
一	二	三	四	五	六	七	八	九
一月、都を檜隈の蘆入野に遷す。	二月、天皇、崩御する。年七十三歳。天國排開広庭皇子、即位する。	三月、物部弓削守屋大連、寺塔・仏像・仏像を焼く。八月、天皇、崩御する。九月、橘豊日皇子、即位する。磐余に宮を造り、池辺双槻宮という。蘇我馬子宿禰を大臣とし、物部弓削守屋連を大連とする。	四月、淳中倉太珠敷皇子、即位する。物部弓削守屋大連を大連とし、蘇我馬子宿禰を大臣とする。	五月、穴穗部皇子(欽明天皇の皇子)、陰に天下に王たらむ事を謀り、物部守屋大連と兵を率いて磐余の池辺を囲む。『逆君』(三輪君逆と君)知りて、後宮に隠れる。穴穗部皇子自ら行き、敏達天皇の寵臣三輪君逆を射殺す。	六月、百濟国王、經論・律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工を献ずる。	七月、蝦夷の魁帥綾糟ら、【景行天皇の御世の例に従い】川の中へ入り、水をすすつて忠誠を盟う。(第1表参照)	八月、百濟より仏像二軀がもたらされる。蘇我馬子、その仏像二軀を請い受け、使者を四方に遣わして、修行者を求める。	九月、百濟より仏像二軀がもたらされる。蘇我馬子、その仏像二軀を請い受け、使者を四方に遣わして、修行者を求める。

\* 欽明天皇の即位は五三〇年か。  
 \* 欽明天皇の元年は、五三二年か。(『法王帝説』第1表参照)  
 \* 『法王帝説』『元興寺縁起』は、仏教伝来の年を、戊午(五三八年)とする。  
 \* 『扶桑略記』と『元亨釈書』は、『繼體十六年壬寅(五二二)に、司馬達等(達止)が佛像をたずさえて来朝した』と述べている。

五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七
<p>二 四月、天皇、三宝に帰依する詔を發す。これをめぐって、群臣の間に紛議が起る。仏教受容に反対する中臣本家筋滅亡。(九日) 天皇崩御する。七月、蘇我馬子宿禰大臣が諸皇子・群臣にすすめて物部守屋大連を滅ぼす。八月、泊瀬部皇子、即位する。</p> <p>この年、百濟国、仏の舍利・僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を献る。蘇我馬子宿禰、飛鳥衣縫造の相樹葉の家を壊して法興寺を作(り始め)る。</p> <p>十一月、結果から言えば、「蘇我馬子宿禰が東漢直駒に天皇を暗殺させた」という解釈も出来得よう(第1表参照)。十二月、豊御食炊屋姫皇女、即位する。</p> <p>四月、厩戸豊聡耳皇子(聖徳太子)を皇太子とする。この年、四天王寺を難波の荒陵(玉造ともいふ)に造る。</p>	<p>一 二月、皇太子と蘇我馬子大臣に、『三宝』(中国では土地・人民・政治を指す)興隆の詔が出される。</p> <p>二月、新羅と任那が交戦する。天皇、任那を救おうとして、境部臣を大將軍とし、一万余の軍を率いさせ、新羅を討つ。新羅は降伏したが、また任那を侵す。</p> <p>二月、(かつての)皇太子、宮室を斑鳩に造る。十一月、新羅を攻めることを議る。</p> <p>二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>二 二月、皇太子と蘇我馬子大臣に、『三宝』(中国では土地・人民・政治を指す)興隆の詔が出される。</p> <p>二月、新羅と任那が交戦する。天皇、任那を救おうとして、境部臣を大將軍とし、一万余の軍を率いさせ、新羅を討つ。新羅は降伏したが、また任那を侵す。</p> <p>二月、(かつての)皇太子、宮室を斑鳩に造る。十一月、新羅を攻めることを議る。</p> <p>二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>三 二月、(かつての)皇太子、宮室を斑鳩に造る。十一月、新羅を攻めることを議る。</p> <p>二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>四 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>五 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>六 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>七 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>八 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>九 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>	<p>十 二月、来目皇子を征新羅將軍とする。六月、来目皇子、病に臥して征討を果たさず。十月、百濟の僧觀勒が来朝し、曆本・天文地理書・遁甲方術書を献じる。</p>
<p>十一 二月、『征新羅大將軍来目皇子』(大將軍(西の国の皇太子押坂彦人皇子)と將軍来目皇子のことか) 薨去する。四月、来目皇子の兄当摩皇子を征新羅將軍とする。七月、当摩皇子、難波より発船したものの、……(国策変更によるのであろう) 新羅征討を中止する。十月、都を豊浦宮から小墾田宮へ遷す。十一月、大櫛および鞍を作り、また旗幟に象がく。十二月、冠位十二階を制定する。</p>	<p>十二 一月一日、冠位を始めて賜う。四月、皇太子、憲法十七条を作る。</p> <p>四月八日の花祭(誕生会)の是の日、銅の仏像と、繡の丈六の仏像が完成する(第10表参照)。七月、皇太子、(七月以前の)講經の通りに推古天皇から賜った播磨国の水田百町を『斑鳩寺』に納める。</p> <p>七月、小野臣妹子を大唐(隋)に遣わす。</p> <p>四月、小野臣妹子、隋より帰る。六月十五日、隋の客「裴世清」等、難波津に泊る。八月三日、客ら京に入る。九月、再び小野臣妹子を大使として隋へ遣わす。</p>	<p>十三 二月、『征新羅大將軍来目皇子』(大將軍(西の国の皇太子押坂彦人皇子)と將軍来目皇子のことか) 薨去する。四月、来目皇子の兄当摩皇子を征新羅將軍とする。七月、当摩皇子、難波より発船したものの、……(国策変更によるのであろう) 新羅征討を中止する。十月、都を豊浦宮から小墾田宮へ遷す。十一月、大櫛および鞍を作り、また旗幟に象がく。十二月、冠位十二階を制定する。</p>	<p>十四 一月一日、冠位を始めて賜う。四月、皇太子、憲法十七条を作る。</p> <p>四月八日の花祭(誕生会)の是の日、銅の仏像と、繡の丈六の仏像が完成する(第10表参照)。七月、皇太子、(七月以前の)講經の通りに推古天皇から賜った播磨国の水田百町を『斑鳩寺』に納める。</p> <p>七月、小野臣妹子を大唐(隋)に遣わす。</p> <p>四月、小野臣妹子、隋より帰る。六月十五日、隋の客「裴世清」等、難波津に泊る。八月三日、客ら京に入る。九月、再び小野臣妹子を大使として隋へ遣わす。</p>	<p>十五 一月一日、冠位を始めて賜う。四月、皇太子、憲法十七条を作る。</p> <p>四月八日の花祭(誕生会)の是の日、銅の仏像と、繡の丈六の仏像が完成する(第10表参照)。七月、皇太子、(七月以前の)講經の通りに推古天皇から賜った播磨国の水田百町を『斑鳩寺』に納める。</p> <p>七月、小野臣妹子を大唐(隋)に遣わす。</p> <p>四月、小野臣妹子、隋より帰る。六月十五日、隋の客「裴世清」等、難波津に泊る。八月三日、客ら京に入る。九月、再び小野臣妹子を大使として隋へ遣わす。</p>	<p>十六 一月一日、冠位を始めて賜う。四月、皇太子、憲法十七条を作る。</p> <p>四月八日の花祭(誕生会)の是の日、銅の仏像と、繡の丈六の仏像が完成する(第10表参照)。七月、皇太子、(七月以前の)講經の通りに推古天皇から賜った播磨国の水田百町を『斑鳩寺』に納める。</p> <p>七月、小野臣妹子を大唐(隋)に遣わす。</p> <p>四月、小野臣妹子、隋より帰る。六月十五日、隋の客「裴世清」等、難波津に泊る。八月三日、客ら京に入る。九月、再び小野臣妹子を大使として隋へ遣わす。</p>	<p>十七 九月、小野臣妹子ら、隋から帰国する。</p>	<p>十八 九月、小野臣妹子ら、隋から帰国する。</p>	<p>十九 九月、小野臣妹子ら、隋から帰国する。</p>	<p>二十 九月、小野臣妹子ら、隋から帰国する。</p>	<p>二十一 九月、小野臣妹子ら、隋から帰国する。</p>

\* 『皇年代略記』等は六十九歳、『神皇正統記』等は四十一とする。なお、『記』には「丁未年四月十五日崩」とみえ、年月は日本書紀と合い、日は合わない。

\* 崇峻天皇の崩年について、平安以降の諸書は七十二、或は七十三とする。

\* 舒明天皇(押坂彦人皇子の子)誕生(皇胤紹運録・一代要記などに舒明天皇の崩年四十九とあり、逆算)

\* 等与刀弥々大王、小国日辺日本国の王『粟散王』として即位。(紀・伝曆、他参照)

\* 開皇二十年(六〇〇)、倭王、使者を隋の都へ遣わす。(隋書倭国伝)

\* 西の朝廷の皇太子押坂彦人皇子(皇室嫡流(敏達天皇の皇子))の薨去が、一朝時代廢絶の契機(切っ掛け)になったのではなからうか。

\* 東西の朝臣達を一系列下に置く為、冠位十二階が制定されたのたろう。

\* 恐らくこの頃、等与刀弥々大王は(皇太子)となられたのであろう。(補闕記等参照)

\* 『経籍後伝記』に、「皇帝(煬帝)、倭王を問う。聖惠太子、甚だその天子の号を黜け、倭王となすを悪みて、その使を賞です。仍りて報書して曰く、東天皇、西皇帝に白す云々」とある。(『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事)において既述)

\* 推古十七年四月八日の花祭(誕生会)の是の日、丈六の銅の仏像(飛鳥大仏)を、飛鳥の元興寺金堂内に安置する。(飛鳥大仏銘文・推古紀十四年四月八日(是の日条)参照)

六〇	十八	十月、新羅・任那の使者、京に至る。
六三	二十一	十二月、皇太子、片岡(今、奈良県北葛城郡香芝町今泉)に遊行でまし、道のほとりに臥している飢者をあわれむ。
六四	二十二	六月、犬上君御田歙・矢田部造を大唐(隋)に遣わす。
六〇	二十八	皇太子と馬子とは、共に議り、(以前から存在していた)天皇記・国記・臣連伴造国造百八十部・公民等の本記を録した(諸処写し取った)。
六三	二十九	二月、皇太子廐戸豊聡耳皇子、斑鳩宮で薨する。
六六	三十四	五月、蘇我馬子大臣、薨する。
六六	三十六	三月七日、天皇、崩御する。年七十五歳。
六九	十一	七月、百濟宮を造る。また、百濟大寺(聖徳太子が創建された熊野寺の後身の寺)を造りはじめ。十二月十四日、天皇、伊予の温湯宮に行幸する。
六九	二	八月、犬上君三田相・薬師恵日(唐)に遣わす。十月、天皇、飛鳥岡のほとりの岡本宮に遷る。
六三	四	十月、唐国の高表仁ら、難波津に泊る。
六三	五	一月、高表仁ら、国に帰る。送使吉士雄摩呂ら、対馬に到りて還る。
六九	一	一月、田村皇子、即位する。
六九	二	八月、犬上君三田相・薬師恵日(唐)に遣わす。十月、天皇、飛鳥岡のほとりの岡本宮に遷る。

\*『国史編纂事業が開始された』ということ、聖徳太子薨去の前年条で述べたものと解される。  
 \*聖徳太子と馬子とは、『旧事本紀』(『先代旧事本紀』とも『旧事紀』とも称される書物)を筆録されたのだから。  
 \*ただし、法隆寺『釈迦三尊像』の光背銘は、翌年六十二年(推古天皇三十年)の薨去とする。  
 \*『記』に治世三十七歳、戊子年(六二八年)三月十五日崩とある。  
 \*最初の遣唐使である。  
 \*『旧唐書』六三一年条に、「新州(廣東省新興縣)の刺史(刺史)高表仁を遣わし、節を持して往きて之を撫せしむ。表仁綏遠の才無く、王子(新唐書)には、王とある)と禮を争い、朝命を宣べずして還る」と記載されている。

1925-1/2  
1925-1/2

1925-1/2  
1925-1/2

1925-1/2  
1925-1/2

六〇	十二	四月、天皇、伊予から遷る。
六三	十三	十月、天皇、百濟宮で崩御する。
六三	一	一月、舒明天皇の皇后天豊財重日足姫、即位する。蘇我臣蝦夷、大臣となる。大臣の子入鹿、国の政を執る。
六三	二	十一月、蘇我臣入鹿、巨勢徳太皇太后を遣わし、山背大兄王らを斑鳩に襲わせる。山背大兄王、子弟・妃妾と一時に自ら縊死する。
六三	三	一月、中臣鎌子連を神祇伯とする。十一月、蘇我大臣蝦夷と入鹿、家を甘藷岡にならべて建てる。
六三	一	六月八日、中大兄皇子、蘇我入鹿暗殺の謀を倉山田麻呂臣に語る。十二日、十二の通門をさしかため、大極殿前に入鹿を斬り殺す。
六三	一	十三日、蘇我臣蝦夷らを誅するに臨み、天皇記・国記・珍宝を焼く。船史恵尺、国記を取りだして中大兄皇子に献じる。蝦夷殺される。十四日、軽皇子、即位する。中大兄皇子、皇太子となる。阿倍内摩呂臣が左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣が右大臣、中臣鎌子連が内臣となる。十九日、皇極天皇四年を改めて大化元年とする。
六三	二	九月、使者を諸国に遣わして、兵器を治めさせる。古人皇子、蘇我田口臣川堀らと謀反をはかり、殺される。十二月、都を難波長柄豊碕に遷す。
六三	二	一月、改新の詔を發布する。三月、殉死を禁止する。
六三	三	この年、七色十三階の冠を制定する。

\*六四〇年の正月を、大倭国(九州)で過ごされたのだから。  
 \*『皇胤紹運録』『代要記』『扶桑略記』などは四十九歳とする。もともと、『扶桑略記』舒明十三年条に、「二説云。讓位於皇極天皇、号ニ太上天皇」とある。

\*諸氏族が『帝紀』『本紀』を所有していたものと思われる。(古事記)の冒頭参照  
 \*焼ける前に取り出された『国記』をはじめとする文字資料の悉くが、後年、茶毘に付されたのである。  
 \*諸国の兵器(等)を、強引に掻き集めたのではなからうか。  
 \*但し、一度きりでなく、何度も何度も執拗に没収したことだろう。

六	六	六	六
天智	天智	天智	天智
二	一	七	六
百濟滅亡し、日本の船師、および佐平余自信ら日本へ向かう。	五月、豊璋を立てて百濟国の王とする。十二月、百濟の王豊璋ら、朴市田來津の進言をきかず、州柔から避城へ都を遷す。 三月、前將軍上毛野君稚子ら、二万七千人を率いて新羅を討つ。八月、白村江で唐・新羅連合軍と戦った官軍は敗れ、朴市田來津戦死。百濟の王豊璋、高麗へ逃げる。九月、百濟の州柔城、唐に降る。	一月六日、天皇、新羅征討のため出帆する。八日後の一月十四日、御船、伊予の熱田津の石湯行宮に泊る。それから二ヶ月以上も後の三月二十五日に、御船、娜大津(博多)へ至る。四月、天皇、朝倉宮(福岡県朝倉郡)に遷る。五月、朝倉橋広庭宮(四月条の「朝倉宮」とは別の宮なのだろう)へ遷る。七月、天皇、崩御する。皇太子中大兄皇子、称制(即位の式を挙げずに政務を執ること)する。	一月、高麗の使人乙相賀取文ら百余人、筑紫に泊る(五月、難波館に到る。七月、歸国する)。五月、皇太子(中大兄皇子)、初めて漏剋(水時計)を造る。七月、百濟が(二応)滅ぶ。十月、百濟の鬼室福信、使者を遣わして唐の俘(〇〇余人を献じ、「日本の)天朝で人質になっている王子豊璋を迎え、百濟国の王にしたい」と申し出る。

\*『紹運録』『水鏡』などに崩年六十八歳。『帝王編年記』に六十一歳とある。  
\*皇太子中大兄皇子は、何故、天皇位に即かなかつたのだろうか。恐らく、父舒明上皇が重祚して天皇(高市天皇)となられたからであろう。(皇極紀二年九月六日条に、「高市天皇」と記されている。第1表参照)

\*これ以降(天智紀末まで)、「重出」をよそおつた記事が頻出する。  
\*察するところ、  
「天智紀七年一月三日条の異様な(重要な)記事を書きため、近傍に「重出」と見紛う文言を多数鏤めたのだろう」と思われる。

六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
天智	天智	天智	天智	天智	天智	天智	天智	天智	天智
五	四	三	二	一	五	四	三	二	一
白雉	白雉	白雉	白雉	白雉	白雉	白雉	白雉	白雉	白雉
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
うけ自殺する。	二月、白雉出現により改元。四月、新羅、使を遣わして朝貢する。 三月、丈六の繡像できあがる。皇極上皇、十師を請じて設齋する。 一月、班田をおわる、田、長さ三十歩を段とし、十段を町とする。 四月、戸籍を造り、五十戸を里とし、里ごとに長一人を置く。九月、難波長柄豊碓宮が完成する。	五月、吉士長丹ら二一人を大唐に遣わす。是歲、「孝徳天皇を難波長柄豊碓宮に残して」、皇極上皇・間人皇后(孝徳天皇の皇后)・中大兄皇子・百官ら多くが、飛鳥へ移り住む。 二月、押使高向史玄理らを大唐に遣わす。十月、天皇、崩御する。 一月、皇極上皇、飛鳥板蓋宮で即位する。	この年、飛鳥の岡本に宮地を定め、天皇、後飛鳥岡本宮に遷る。香山の西より石上山に至る渠をほる。未だ成らざる時、時の人は、「狂心の渠」といった。(第1表参照) 九月、「孝徳天皇の皇子の)有間皇子、狂人をよそおう。 四月、阿倍臣(名をもらせり)、船師一八〇艘を率いて蝦夷を討つ。 五月、齊明天皇の孫の建王(中大兄皇子と、蘇我倉山石川麻呂の娘の遠智娘との子。白雉二年(六五二)生まれ。啞であった)が、八歳で薨去する。十一月、有間皇子、十九歳にして、謀反のかどで誅殺される。この年、唐・新羅が力を併せて、百濟を攻める。 三月、阿倍臣(名をもらせり)、船師一八〇艘を率いて蝦夷を討つ。 七月、坂合部石布らを唐に遣わす。	二月、冠十九階を制定する。三月、蘇我倉山石川麻呂、謀反の疑いをうけ自殺する。	二月、白雉出現により改元。四月、新羅、使を遣わして朝貢する。 三月、丈六の繡像できあがる。皇極上皇、十師を請じて設齋する。 一月、班田をおわる、田、長さ三十歩を段とし、十段を町とする。 四月、戸籍を造り、五十戸を里とし、里ごとに長一人を置く。九月、難波長柄豊碓宮が完成する。	五月、吉士長丹ら二一人を大唐に遣わす。是歲、「孝徳天皇を難波長柄豊碓宮に残して」、皇極上皇・間人皇后(孝徳天皇の皇后)・中大兄皇子・百官ら多くが、飛鳥へ移り住む。 二月、押使高向史玄理らを大唐に遣わす。十月、天皇、崩御する。 一月、皇極上皇、飛鳥板蓋宮で即位する。	この年、飛鳥の岡本に宮地を定め、天皇、後飛鳥岡本宮に遷る。香山の西より石上山に至る渠をほる。未だ成らざる時、時の人は、「狂心の渠」といった。(第1表参照) 九月、「孝徳天皇の皇子の)有間皇子、狂人をよそおう。 四月、阿倍臣(名をもらせり)、船師一八〇艘を率いて蝦夷を討つ。 五月、齊明天皇の孫の建王(中大兄皇子と、蘇我倉山石川麻呂の娘の遠智娘との子。白雉二年(六五二)生まれ。啞であった)が、八歳で薨去する。十一月、有間皇子、十九歳にして、謀反のかどで誅殺される。この年、唐・新羅が力を併せて、百濟を攻める。 三月、阿倍臣(名をもらせり)、船師一八〇艘を率いて蝦夷を討つ。 七月、坂合部石布らを唐に遣わす。	二月、冠十九階を制定する。三月、蘇我倉山石川麻呂、謀反の疑いをうけ自殺する。	二月、白雉出現により改元。四月、新羅、使を遣わして朝貢する。 三月、丈六の繡像できあがる。皇極上皇、十師を請じて設齋する。 一月、班田をおわる、田、長さ三十歩を段とし、十段を町とする。 四月、戸籍を造り、五十戸を里とし、里ごとに長一人を置く。九月、難波長柄豊碓宮が完成する。

\*奈良盆地北端域の湿地帯を埋めて「丘」とし、そこに「平城京」を造営する為、多くの者達が飛鳥へ移っていったのだろう。  
\*「阿倍臣」については、『日本書紀』(下)日本古典文学大系、岩波書店(第3刷)、補注二六一に詳述されている。  
\*齊明紀四年四月条の「阿倍臣」とは別人なのかも知れない。

④4683-1/2  
④4696-1/2

空 空 空

④4671/49<sup>1</sup>

空 空

④4675<sup>2</sup> 空

3824三輪山 空

④4680<sup>1</sup>

④4492<sup>2</sup> 皇太子即位  
④4547<sup>1</sup> 99

⑤

三 二

二月、冠位二十六階を制定する。是歳、対馬・吉岐・筑紫国等に防人と烽(のろし)を置き、筑紫に水城を築く。  
八月、城を長門国に築く。筑紫国に大野城と椽城を築く。

六月、二月二十七日、高麗・百濟・新羅、皆御路に哀奉る。皇太子(中大兄皇子)、「我皇太后天皇(斉明天皇)と高市天皇(舒明天皇)のことか」の勅したまへる所を奉りしより、「云々」とのたまふ。

三月、皇太子(中大兄皇子)が即位されたのたろう(天智紀七年一月三日条参照)。三月十九日、都を近江(実は婁大津か)へ遷す。この時、天下の百姓(百もの姓)、都遷すことを願わず、諷諫(遠回しにいさめること)する者が多い。失火(出火・火災)が相次いだ。

七月、一月三日、皇太子(大友皇子)が即位されたのであろう。天智紀七年一月三日条に、「皇太子即天皇位す。或文に云はく、六年の三月に位に即きたまふ」とある。(但し、天智紀七年是歳条に、「沙門道行、草薙剣を盗みて、新羅に逃げ向く。而して中路に風雨にあひて、荒迷ひて歸る」と記されている)

七月、燃土(石炭)と燃水(石油)とが献上される。(献上させたのたろう)

十月、大唐の大將軍英公が、高麗を打ち滅ぼす。

天智天皇の元年(六六八年)に、大海人皇子、東宮(皇太子)となる。(天武即位前紀参照)

十月、藤原内大臣(鎌足)薨す。十二月、大蔵に火災。是の冬、斑鳩寺に火災。

二月、戸籍(庚午年籍)を造る。四月三十日の夜半之後に、法隆寺炎上。一屋も餘ること無く全焼。

十一月、大友皇子、太政大臣となる。蘇我赤兄臣を左大臣、中臣金連を右大臣、蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大人臣を御史大夫とする。冠位・法度(法律)を施行する。(この当時の太政大臣は、国政を統理するものであった、と見られている)

四月、(斉明紀六年五月条の)漏刻(水時計)を新しい台に置き、始めて用いる。

十月、東宮(皇太子)大海人皇子、吉野にはいる。

十一月二十四日、近江宮炎上。「近江宮に災けり。大蔵省の第三倉より出でたり」とある。

源みぎ 御所  
④4599  
(居処)

\*あるいはこの頃、肥後国内陸部の菊鹿盆地に、鞠智城が築かれたのかも知れない。(統紀一文武二年五月条参照) 天智紀に「赤兄皇子御所を吉野に遷す」とあり、大和国および肥後国(鞠智城)の二ヶ所が、天皇の本拠地(居処)とされ、この二ヶ所を守るような配置に、多数の神籠石(朝鮮式山城)が順次築かれていった、と察せられる。

\*舒明上皇(高市天皇)が崩御されたのではなからうか。

\*この時点まで、皇太子(中大兄皇子)は、東の大和国で称制しておられたように見受けられる。

\*九州地方の人々は、中大兄皇子が即位して、婁大津に都するのを望まなかったようである。

\*百姓は、——(日本では通常農民をさすが)中国では元来百官(多くの官吏)をいう。(「三国史記」)

(2)井上秀雄訳注、平凡社、二九三頁、注四参照)

\*天智天皇の都は大和国に、大友天皇(弘文天皇)の都は大宰府に定められた、と考えてみたい。

\*もつとも、大友天皇の神璽の剣(草薙剣)の盗難により、この折の二朝時代は忍ち終焉したと解される。(「懐風藻」大友皇子伝。天智紀七年是歳条参照)

\*有明海への入口、および瀬戸内海に、多数の茅胎を配置し、いざという時、茅に石油をふりかけ、火のついた石炭で着火しようとしたものと思われる。

\*大友皇子が即位された時、大海人皇子が皇太子になられたのであろう。

\*大和国の斑鳩寺(現法隆寺)の講堂・回廊北半部が焼失した、と解される。(第10表参照)

\*西の大倭国(肥後国)の『法隆寺』が茶毘に付された、と推察される。(第10表参照)

\*冠位・法度の内容を記さないのは異例だという。(大宰府で、新冠位・法度が施行されたのではなからうか)

\*漏刻は、大宰府の月山(辰山の転という)に置かれたのかも知れない。(「大宰府遺跡」鏡山猛、ニューサイエンス社、三八頁参照)

\*大海人皇子は、肥後国緑川南岸の吉野へ行かれた、と仮定したい。(第12図参照)

\*大宰府が炎上したのであろう。(但し、後殿や正殿は焼けなかったように見受けられる。第25図参照)

照

十二月三日、天皇、近江宮でお崩れになる。

空  
天武

六月二十二日、《壬申の乱》勃発。村国連男依らに詔して、『不破の関』に相当する『関門海峡』〔文字関と馬関との間の長豊海峡〕を封鎖せよ、と命じる。

六月二十四日、大海人皇子、東国（九州の東側の地域）へ向かう。

六月二十六日、馬城峯（大元山）山頂の『天照大神の宮』（内宮）を望拝する。『東海の軍』（瀬戸内海を東へ向かう軍）と『東山の軍』（山陽道を東へ向かう軍）を発す。

六月二十七日、大海人皇子、不破の野上に到る。高市皇子に、悉の軍事（大宰府攻略の軍事全ての意であろう）を授ける。

六月二十九日、大倭国（肥後国）に留まっていた大伴吹負が、詐つて『タケチノミコウ』（高市皇子に酷似）と名告り、帰化人の秦造熊にフンドシをさせ、馬を馳せさせ、『タケチノミコウ』が不破の方からやってきた。大軍が従っているぞ」と叫ばせる。

\* 天智天皇は、大宰府で大海人皇子に譲位した後、山科（京都市東部）へ赴かれた、と想像される。  
\* 舒明紀十三年十月条に年十六とあるによれば、天智天皇の崩年は四十六歳。「帝説」によれば四十七歳。平安以後の諸書に五十三歳、五十八歳などがある。  
\* 『日本書紀』は、『壬申の乱』の前段で、九州北辺および肥後国における展開について述べ、――後段で、近畿地方の戦況を述べているように解される。

\* 大海人皇子は、大友皇子の頭が届くまで、不破の野上（野上の行宮）から動かない。「東の天智上皇の軍がやって来た時にそなえ、『大里』（旧地名「柳」。門司と小倉の間）あたりに軍営を置かれたのである。』

\* 『長門本平家物語』に、「柳は、……すこし故ある所なり」とある。「赤旗を掲げた大海人皇子に倣い、赤旗を旗印とする平家一門が、柳宮を置いて内裏としたのかも知れない」

七月二日、高市皇子軍が、近江（大宰府）目指しての進撃を開始する。

七月二十三日、大友皇子、逃げ場を失い、『山前』（所在地については古来諸説がある）で自殺する。

一方近畿地方では、七月一日、將軍大伴御行（別名「高市大卿」という。すなわち「高市の御行」。故あって、「吹負」と記されている）等が大和国で挙兵する。出沒自在の遊撃戦が繰り返される。

やがて（日付不明。七月半ば頃か）、長らく待ち続けてきた『東の師』（東山の軍）が、西の方から頻りに次々と到着する。

七月二十二日（大友皇子自殺の前日）、大海人皇子軍は、淀川の南に駐屯する。

七月二十四日、筱浪（滋賀県大津市あたり）で、左右大臣、諸の罪人等（天智上皇等の意であろう）を探り捕る。〔\* 近畿地方での戦勝の報は、直ちに、野上の大海人皇子へ伝えられたに相違ない〕

七月二十六日、大友皇子の頭が、大海人皇子の陣営の前に献られる。

\* 『壬申の乱』当時、次の三人の大伴氏が大いに活躍したようである。  
(1) 『馬来田』（孝徳朝の右大臣大伴長徳の弟）は、大海人皇子につき従い、東国へ向かった。「追贈されているので、大功を立てたと考えられる」  
(2) 『吹負』（馬来田の弟）は、大倭国（肥後国）に残り、武功を挙げようと機会をうかがった。六月二十九日、吹負は詐つて、「俺はタケチノミコウだ」と言った。

(3) 『御行』（大伴長徳の子。大伴氏の本家筋に当り、別名「高市大卿」という。高市の御行とも呼ばれていたのだから）は、大和国で遊撃戦を行ない、天智上皇軍の耳目を南へ引きつける働きをした。  
\* そこで、『日本書紀』の編纂者達は、大伴御行（高市の御行）のことも「吹負」と記載したのである。また、その他もろもろのカラクリにより、「壬申の乱」の記述が非常にややこしくなっているものと思われる。

\* 大海人皇子は、七月二十六日に大友皇子の頭が宮の前へ献られた後、馬城峯（大元山）山頂の『天照大神の宮』（内宮）に詣でて戦勝の御報告をし、近畿（滋賀県）の方へ向かわれたのではなからうか。

それから《一ヶ月後》の八月二十五日、重罪八人を極刑とし、右大臣中臣連金を近江国の浅井(琵琶湖の東北域)で斬る。九月八日に車駕帰途につく。桑名・鈴鹿・阿閉・名張を経て、九月十二日に「倭京」(大和の都)へ到る。  
※大海人皇子が、南伊勢山中の「天照大神の宮」(外宮・離宮)に立ち寄って、勝利し得たことを厚く感謝された。ようには見受けられない。(第9表参照)  
※すでに、宇佐国の内宮への参詣を済ませておられたからなのだろう。(第9表参照)  
是歳、宮室を岡本宮の南に造る。飛鳥浄御原宮という。

二

二月、大海人皇子、即位する。

三

二月、紀臣阿閉麻呂卒す。天皇、大いに悲しみ、壬申の年の役の勞を賞し大紫位を贈る(以下の追贈記事省略)。八月、忍壁皇子を右上帝宮へ遣わし、膏油で神宝をみかせる。

四

一月、占星台(天文台か)を建てる。三月、粟隈王を兵政官長とし、大伴御行を大輔(次官)とする。十一月、宮の東の岳で妖言し、自ら首をはねて死んだ者がいた。

五

是年、新城(平城)を都にしようとする。しかし遂に都せず。

六

四月、天皇をそしつた杖田史名倉を、伊豆嶋に流す。

七

四月、新宮の西の庁舎(平城宮の下層遺構か)の柱に落雷する。

八

五月、「吉野の会盟」において、千歳の後にも事が無いように盟す。七月十七日、四位葛城王(天智天皇のかつての官位、および名前)が卒す。(第1表参照)

4978 159

九

十一月、皇后不豫(病気)のため、薬師寺を造る。

十

三月十七日、天皇、大極殿(通常、飛鳥浄御原宮と考えられているが平城宮かも知れない)において、川嶋皇子ら十二人に詔し、帝紀・上古の諸事を記定させる。三月二十五日、新宮の井のほとりに出でまして、鼓や笛の練習をおさせになる。

十一

三月一日、使者を新城に遣わして状況を視察させる。三月十六日、天皇、新城に幸す。

十二

二月、大津皇子、朝政を執る。十二月、詔して、「都城・宮室は、一とこ所に非ず、両・参造らむ」とたまふ。

十三

閏四月、飛鳥寺の僧福楊、獄中で自ら首を刺して死ぬ。十月、諸氏の族姓を改めて、八色の姓を制定する。守山公ら十三氏に真人の姓を賜う。十一月、大三轮君ら五十二氏に朝臣の姓を賜う。十二月、大伴連ら五十氏に宿禰の姓を賜う。

十四

一月、諸王十二階、諸臣四十八階の爵位を定める。六月、大倭連ら十一氏に忍寸の姓を賜う。

十五

六月、草薙剣を、尾張国の熱田社に送り置く。「二朝の世が来ないよ」に、草薙剣を封印したのであろう。これ以降長らく、草薙剣は祭祀されなかったという。(古語拾遺)参照)

45016

十六

七月、元を改めて朱鳥元年という。八月、天皇不豫のため神祇に祈る。九月、天皇、お崩れになる。皇后、称制する。十月、大津皇子、謀反をはかり死を賜う。

十七

四月、筑紫大宰、投化(帰化)した新羅の僧尼・百姓二十二人を献じる。

\*なお、九州地方の《地名の改称》が、「壬申の乱」終結後、最高権力者「天皇」の名において行なわれた可能性もあろう。それとも「日本書紀」は、ただ単に、近畿地方の地名を借用しているだけなのだろうか。

45017/2

\*本来の歴史観を大きく変更する施策が矢継ぎ早に打ち出され、これを諫める者達が続出したように思われる。  
\*六十七年、新羅が、唐軍を朝鮮半島から追い出す。(ようやく、日本に平穩の時がやってきた)

\*建築中のそそり立っている柱に落雷した、と解される。

\*壬申の乱の端緒となった六七一年を一年目とし、《百年後(七七〇年)に皇統を天智天皇系へ移す》という盟約が、嚴重に取り交わされたのたろう。

\*この当時「新城」・「新宮」が、天武天皇の格別な関心事だったようである。  
\*広大な平城京域を埋め立てる作業が、突貫工事で押し進められていた、と想像される。  
\*難波宮と平城宮が陪都とされたのではなからうか。

\*僧福楊は、国の大切な遺産や伝統を(無意味に)抹殺している現状を嘆かわしく思い、当今の政治に対する強い非難の意味を込め、自ら首を刺して死んだのたろう。

\*ともあれ結果として、神璽の八咫鏡は伊勢の国に、草薙剣は熱田社に、「第一期二朝時代を迎えるに当り」更に造った鏡と剣は宮中に安置された、と解される。(第9表参照)  
\*『一代要記』『皇胤紹連録』に六十五歳崩、「神皇正統記」などに七十三歳とある。

いつの頃か、中国の右前に合わせた服の左袖が参考か？

充	充	充	充	充	充	充	充
三	四	五	六	七	八	九	十
<p>一月十八日、天皇(正式には未だ天皇でない)、吉野宮に幸す(持統天皇の吉野宮への行幸記事は実が多いが、これが初出)。四月、皇太子草壁皇子を薨去する。</p>	<p>一月、神璽の剣・鏡を皇后に奉る。皇后、吉野宮に幸す。即位する。七月、高市皇子(後皇子尊ともいう)を太政大臣とする。九月、戸籍(庚寅年籍)を造らせる。</p>	<p>八月、大三輪・藤原・巨勢・春日・大伴・紀伊・阿倍・佐伯・阿曇氏ら十八氏に詔し、その祖等(その他諸々の氏の祖等)の『墓記』を上進らせる。</p>	<p>五月、藤原の宮地の地鎮祭をする。</p>	<p>一月、詔して、天下の百姓に黄色の衣、奴には早衣(黒衣)を着用させる。</p>	<p>十二月、藤原宮に遷る。</p>	<p>九月、小野朝臣毛野ら、新羅に出発する。</p>	<p>七月、後皇子尊(高市皇子)を薨去する。十月、仮りに右大臣丹比真人に資人(舍人)一二〇人、阿倍朝臣御主人・大伴宿禰御行に八十人、石上朝臣麻呂・藤原朝臣不比等に五十人を賜う。</p>
<p>十一月、八月、天皇、皇太子(文武天皇)に讓位する。</p>							

3559  
1399  
1793  
紀下519

\*持統天皇は、在位十一年の間に、三十一回も吉野宮へ行幸されている。持統天皇は、吉野宮で国史編纂に励んでおられる天武天皇の御意向を伺いつつ、天皇としての務めを果たしてゆかれたのであろう。(讓位後も持統太上天皇は、文武天皇の大元元年六月二十九日に吉野宮へ幸し、七月十日に歸り至られた)

\*『墓記』(祖先の事績など、氏の伝承を記した文書)「広辞苑」(墓記)参照)が、ことごとく没収されたのだらう。

\*大伴御行(701)は、生前、次の歌(万巻十  
九・四二六〇)を作った。

大君は 神にし坐せば  
赤駒の 匍匐う田井を 都となしつ  
\*『大君』は天武天皇、『都』は平城遷都(710)以前にすでに築かれ、陪都の一つとされていた平城宮のことではなからうか。

4861  
末



〔著者紹介〕

<sup>こがけいさく</sup>  
古閑炯作

昭和16年（1941年）5月に生まれる。

著書

・『小野小町』第1刷、第2刷。（株）新人物往来社〔現在、株式会社KADOKAWA〕。

（『新・やまと物語』の末尾あたりから一部抜粋）

\*第2刷（91頁）「第九十三章」から読んでいただきたいと思います。

興味深い筋書きとなっています。

・『新・やまと物語』第一巻・第二巻まで刊行。株式会社KADOKAWA。

・『新・やまと物語』第三巻以降は、インターネットで、閲覧ください。

383/383

古閑炯作

（第13巻） 694/694